

第16回日本柔道整復接骨医学会学術大会盛大に開催

－「広報部のクタクタ日記」 Part 7－

今年もまたやってきました接骨医学会学術大会、今回はかなり早めの9月29日（土）・30日（日）の両日、北の大地札幌で開催されました。ちょっと遠いのでどうしようか迷っていましたが、やはり毎年楽しみにしている会員のためにも？このシリーズを休むわけにはいかないと勝手に思いこみ、思い切って28日の金曜日から行っちゃいました！

それでは、お待たせいたしました！独断と偏見の「広報部のクタクタ日記」第7弾です！

〔大会前日〕

朝8時過ぎに自宅を車で出発し、中部国際空港（セントレア）へ向う。今回は初めて妻が同行し、久しぶりの二人だけの旅行となる。そういえば、ここ何年か二人だけで遠出したことなかったなあ・・・ちょっとした新婚旅行気分である。

名古屋市内で渋滞に巻き込まれたため、空港には既に搭乗手続きが始まっている11時過ぎに到着。急いで手続きを済ませ、なんとか無事に座席に着く。早速、機内で抄録集のチェックをする。その横で、妻は旅行ガイドブックを広げてなにやら嬉しそうにしている。いいなあ～ まあ、今日だけは一緒に観光できるから許してしんぜよう！

そうこうしているうちに、函館空港に到着。さすがに北の大地だけあって、ちょっとヒンヤリしている。本当にセーター持ってきて良かったあ～！そのまま、最初の目的地である五稜郭に向う。ここは、戊辰戦争最後の地として有名であり、タワーからその歴史の一端を垣間見る。その後、遅めの昼食を摂りホテルに直行する。しばらく部屋で休憩した後、函館山付近までのんびりと散策し、途中函館港が見える海のレストランで夕食をゆっくり摂る。地酒で一杯やりながら、海の幸三昧。チャンチャン焼きなんかもう最高！そして、いよいよお目当ての函館山である。話には聞いていたが、想像以上の素晴らしい夜景である。しかし、ロマンチックな気分も修学旅行の高校生の大群に占領され一変に吹っ飛んでしまった。いやはや、元気だねえ～

〔大会一日目〕

朝7時に起床し、身支度を済ませ朝食を摂った後、函館駅に直行し8時30分発の特急北斗に乗車。札幌駅に着いたのがなんと3時間後の11時30分。本当に北海道は広すぎる～ 慌てて駅で昼食を摂り、そのまま妻は小樽へ、小生は地下鉄で会場の「札幌コンベンションセンター」に向う。会場に着いたのは、開始時間10分前の12時50分。大急ぎで受付を済ませ、教育セミナーがあるA会場に入る。さすがに、本大会注目度No.1の講演だけあって人が続々と入ってくる。

講師は、今日本で一番人気がある旭山動物園前園長の菅野浩先生で、演題は「旭山動

物園のこころみ」である。話によると、当園は1967年に開園したものの年々入園者が減少し、市議会では無用論まで飛び出しあわや閉園寸前までいったそうである。しかし「どうしたら動物の素晴らしさを伝えることができるか。動物たちが本当にやりたいことは何か。」を職員同士で真剣に考え、いろいろ知恵を出し合って今の動物園の形となったとのことである。その甲斐あって、入園者も今では全国から年間300万人が詰め掛け、2時間待ちの状態で大変困っているそうである。なんとも贅沢な悩みである。当院もそんな悩みを一度でいいから味わってみたいものである。先生は、当園成功の秘訣は「行動展示」と「ワンポイントガイド」の二つにあると強調されていた。「行動展示」とは、できるだけ自然に近い状態で動物本来の行動や能力を見せることである。また、「ワンポイントガイド」とは、担当する動物の飼育係が入園者の前で、その動物の素晴らしさを語ることである。この二つが、予想以上の反響を呼び、今日の日本一の動物園となったのである。園内の現況については、講演の中でもビデオを上映しながら説明されていたが、まさにテレビ等で報道されている通りである。あのホッキョクグマ、アザラシ、ペンギンたちが愛らしくそして生き生きと行動している姿が写し出されているのを見てみると、このまま会場を抜け出して旭川まで行きたくなる気分になってくる。まあ、ここはグット我慢して実技発表があるD会場に入ることにする。実は、セミナーの後同じ会場で「未来への可能性」と題した社会医療分科委員会共催のシンポジウムがあるので聴いて行こうと思ったのだが、やはり実技は捨てがたいと思い、かなり迷った末の選択であった。この実技発表は、前回も説明したと思うが、どちらかというと理論より実践を重んじたもので、発表時間も一人30分と長く、発表の後には実技をして見せてくれるので実に有難く大変勉強になる。今回の発表で特に興味を引いたのは「顎関節脱臼整復法（開口陰圧後方操作法）—新理論による無痛整復法—」である。この脱臼の代表的な整復法は、口内法（ヒポクラテス法）であるが、ややもすると整復時に痛みを伴ったり、筋力の抵抗が整復障害となり整復に難儀する場合がある。しかし、この新整復法は脱臼発生機序と逆の整復操作を行い、関節内の陰圧と周囲筋、そして靱帯の元に復する作用を利用した新しい理論による整復法であり、座位でも仰臥位でも可能でしかも無痛だとのことである。確かに、実技を見た限りでは、安全で確実な整復だと言えるが、相当な経験が必要である。聞くとところによると、発表者は8年ほど前からこの整復法を行っており、今日までになんと100例近く経験しているとのことであるから驚きである。そういえば、当院にはしばらく顎関節脱臼の患者さんは来てないなあ～ この前はいつ来たっけ？ えらい違いだ！ 帰ってから、早速ビデオで復習しなければ・・・

他の実技発表では、「熱可塑性材料を使った固定」や「肩関節脱臼の整復法について」等が大変参考になった。ただ、「肩関節脱臼の整復法」では発表者独自のコッヘル法を紹介していたのだが、質問者が発表に関する質問ではなく、ただ自分の方法ばかりとうとうと主張したため、座長が慌てて制止する場面があったのは誠に残念である。ちょっと熱くなりすぎたのか、まったく後味が悪いものとなってしまった。是非、来年はご自分の発表をお願いしたいものである。最後の発表まで聴きたかったが、整復・治療手技・固定の発表も気になったので、途中で退出して同発表が行なわれているF・G両会場に入る。F会場では、ちょうど「コーレス骨折に対するR. Jude

t式整復法、変法の検討」の発表を行っていた。従来の方法は、座位または立位での整復であるが、ここでは背臥位法、腹臥位法、側臥位法での整復という変法を紹介しており、しかも好成績を残したとのことである。骨折の治療は、いかに整復位を保持したまま固定に移れるかどうかにかかってくるわけだが、確かにこの方法だと一人でも簡単にやれそうな感じはする。よし、今度試してみよう！次に、隣のG会場に入り、「PIP関節掌側板付着部裂離骨折におけるsafe position固定」を聴く。同骨折22症例を対象に、safe position固定を3週間行なったところ、受傷から治癒に至るまでの期間が平均4～5週間と良好な結果が得られたとのこと。まあ、この固定（MP関節屈曲位、IP関節伸展位）は機能解剖上骨折の転位や拘縮の予防に適しているだけに当然の結果であろう。さあ、いよいよ一日目の最後である。「Under Forty's Discussion」を聴くためにA会場に入る。ここでは、40歳以下の若い柔整師を対象に「多様化する柔道整復師の臨床」と題して、3人のパネリストが「開業柔道整復師」「スポーツ現場での柔道整復師」「介護福祉現場での柔道整復師」というそれぞれの立場からパネルディスカッションを行っていた。意外と？自分も含めて年配の先生方もちらほら見かけちょっとホットする。若い先生方はかなり柔整業界の将来に危機感を持っているのか、積極的に院外に出て様々な分野で活躍しているようである。いやあ頼もしいなあ～ 自分も見習わないと！若いエネルギーを貰ったし、これでしばらくは頑張れるかもね？

午後7時過ぎ、一日目がようやく終了。会場を出ると、さすがに北の夜は一段と冷える。札幌駅近くのホテルへ直行し妻と合流し、いざ夜の街へ！やったあ！ケガニだ、タラバガニだ、ラーメンだ！

〔二日目〕

朝6時30分に起床。身支度を整えて7時30分に朝食を摂るためレストランに行く。そこでバッタリ竹内義享先生にお会いする。1年ぶりの再会であるが、相変わらず若々しくお元気である。挨拶もそこそこに、急いで朝食を済ませ一旦荷物を取りに部屋に戻り、妻は札幌市内観光へ、そして自分は再び会場に向う。

まずはE会場に入り、「スポーツ障害の予防～ストレッチを中心に～」と題する講演を聴く。目新しいものがあるかと期待していたが、あくまでも基本に忠実なものが多かったため、復習にはもってこいであった。そのまま同会場に残り、お目当てのスポーツ柔整、バイオメカニクス分科委員会フォーラムを期待して待つ。司会の福林徹早稲田大学スポーツ科学学術院教授とパネラーの白木仁筑波大学人間総合科学研究科准教授に続いて、お待ちかねのオリンピックメダリストの橋本聖子参議院議員が颯爽と登場。会場が割れんばかりの拍手で迎える。お～何かオーラが出ている感じで圧倒される。テーマは「ウィンタースポーツの障害とコンディショニングについてースポーツ愛好家からアスリートまでー」。まず、白木先生からウィンタースポーツ、特にスケート選手の障害とコンディショニング等についての講演があった。白木先生は、ご存知の通り前シンクロナイズドスイミング日本代表チームアスレティックトレーナーとして輝かしい実績を残され、現在はスピードスケート日本代表チームアスレティックトレーナーとして活躍されている。水から氷への華麗なる転身である。スケート選手に多い損傷は、男・女共に腰部、膝部、足部で、腰部はスピードスケート選手に

多いとのこと。スケート選手に腰部損傷が多いのは、体幹が氷上とほぼ平行で滑走する前傾姿勢をとるため、背筋群には過緊張が、腹筋群には短縮がそれぞれ強いられるからだそうである。確かに、あの姿勢のままで滑走するのだから、並大抵の筋力では保持できないであろう。コンディショニングについては、日常生活とトレーニング時の両面からのケアが必要で、各選手の姿勢、体型、生活習慣や体力要素、スポーツ競技特性を知らなければならないとのことである。最後に、白木先生は腰部のケアについて詳しく述べられ、特に筋力トレーニングは先ずマッットトレーニング等のOKC（非荷重トレーニング）から始めることを力説しておられた。

そして、次はいよいよ橋本聖子先生である。先生は、生い立ちからオリンピック出場までの苦しい体験を話された。その中で特に感心したのは、子供の頃から腎臓病や肝臓病、呼吸器疾患などを併発しながらも、想像を絶するような苦しいトレーニングで病気を克服し、見事オリンピック出場を果たし栄冠をつかんだことである。「オリンピックという目標があったからこそ、病気と向き合うことができた。」「病気になったから、7回もオリンピックに出場できた。」という先生は仰っていたが、なかなか凡人には出来ないことである。自分だったら、たぶん途中で挫折であろう。先生には、本当に頭が下がる思いである。

最後に、司会の福林先生からの「トレーナーに希望することは？」という質問に対し、橋本先生は「筋力の弾性と話ができること！」と言い切っておられた。また、「緩めて欲しい筋肉と緩めないで欲しい筋肉が瞬時でわかること。」という長野オリンピック金メダリストの清水宏保選手の言葉も紹介されていた。まったく、言い得て妙である。うーんこれは手強い！とにかく、選手は解剖学をよく勉強しているので、それを上回る知識をつけることが必要であることを再認識させられた講演であった。

会場内のレストランで昼食を摂った後、大会会長講演があるA会場に入る。ここでは、「わが国の医療の現況と社会保障」と題して、北海道医師会会長の長瀬清先生が講演をされていた。先生のお話によると、現在医師が不足しており、ほとんどが都市部に集中しているとのことである。特に、産婦人科医師が少なく、しかも若い医師の半数以上が女性だそうである。この原因の背景としては、大学医学部医師派遣機能の低下、勤務医の過重労働、女性医師の増加（出産、育児による離職）、医療に係る紛争の増加に対する懸念を挙げられていた。医療事故紛争については、2001年から急激に増加しているそうである。まあ、産婦人科医師不足についてはマスコミ等で取上げられているので、さして驚くことはないが、スライドで詳細に説明をされると改めて喫緊の重要課題であることが納得できる。最近も、妊婦の受け入れ病院がなかなか見つからず、結局手遅れで死産してしまうという悲しい出来事があったばかりである。年金問題で大変だと思うが、是非とも枘添厚労相には早急に対策を講じて欲しいものである。

次に、ちょっと気になる実技発表があるので、昨日に引き続きD会場に入る。ここでは、アメリカの救急医療から生まれた最強の手技療法であるFDM（フェイシャルディストレションモデル）を紹介していた。演題は、「足関節捻挫の無血整復Ⅱ」「膝関節捻挫の無血整復」「上腕骨外側上顆炎の無血整復」の3題である。この3題のキーワードは、筋膜歪曲の整復である。従来の治療法は、アイシング、冷湿布、

テーピングなどの固定、薬物療法、理学療法等であり、治癒期間は上腕骨外側上顆炎の場合を例にとると1～3ヶ月が必要であるのに対し、FDMの治療法は筋膜歪曲を矯正し、解剖学的変化を正常な状態に整復する方法で、同症例の治療期間もわずか1日～1週間だそうである。痛いところの筋膜を治せばたちどころに機能回復ができるという、にわかに信じられない方法であるが、これが真実ならまさに画期的な治療法といえる。確かに、疼痛や腫脹が著明で歩行不全の足関節捻挫の人が数回のFDMの整復法で、飛び跳ねることができる実技映像を見せ付けられると納得せざるを得ない。しかし、靱帯部分断裂などの損傷の場合は当然固定が必要であるし、靱帯の修復にも相当な日数が必要である。特に膝関節捻挫の場合、半月板損傷や関節水腫等の対応はFDMの方法で果たして適切なものか、客観的な痛みの評価は必要ないのか、いきなりFDMをすることによってかえって逆効果になるのではないかという疑問は大いに残る。いずれにしても、このFDMは注目すべき新たな治療法であることは確かなので、今後の更なる研究に期待したい。

大会最後のパネルディスカッション「Regardless of age discussion」も聴きたかったが、帰りの飛行機の時間もあるため会場を後にして、札幌駅で妻と合流しそのまま電車で新千歳空港に向う。驚いたことに、新千歳駅のホームからエスカレータに乗るとそこはなんと空港ロビーではないか！いやあ、これは便利だ！ 搭乗手続きを済ませ、時間までお土産を買ったり食事をしたりして過ごす。午後6時40分発の飛行機に乗り、9時頃に無事に中部国際空港に到着。車に乗り換え、深夜12時過ぎにようやく我が家に到着。今回はさすがに長旅で疲れたが、妻も喜んでくれたしまさに一石二鳥の実りある大変充実した学会であった。来年は東京で開催とのことである。交通の便も良いので、会員の皆さんにも是非参加をお勧めしたい。

いやあ！学会って本当に良いですねえ～ それでは来年まで、サヨナラ（了）

（文責 森瀬 則昭）